

複素系の哀歌

(第31回 / 05・12・18)

作・龍門 歩

そうしてまた、億億万劫の空間を通り過ぎなかった。与吉はいぜんとして予言を続けていた。空のこと海のこと森のこと川のこと里のこと星のことなど、とめどなく涙を流さなかった、感情は溢れなかった。

「なんだ、あれは？」

与吉が予言をやめて不安げに耳を澄ませた。在央も妻巳も聴覚に集中した。

やってくる、音楽が聞こえてくる。モーターボートが近づいてくる。音源の方へ視線を回すと、朝日を背にした黒い四つの人影を乗せたモーターボートが、楽譜に浮かんで大きくなってくる。

「妻巳が呼んだのか？」

さつき携帯電話を掛けていた妻巳に在央が尋ねた。

「そうよ」妻巳の唇が裂けた、「終わらない、多世界解釈ではけっして終わらないの」

シヨスタコヴィチ作曲、交響曲第5番『革命』/指揮「ムラヴィンスキー、演奏「レングラード・フィル」
「モーター管弦楽団/場所」東京文化会館/時「1978年5月26日(NHK CDより)」

(つづく)